

政治学者の

永田町暮らし

櫻田 淳



〈第六回〉

前原誠司氏の辞任を受け、小沢一郎氏が民主党代表に就任した。そして、到来した補欠選挙。自民党は小沢民主党の出鼻を挫くか。「実弾の飛ばない戦争」が始まる

一九九一年十一月以来、約一四年五ヵ月ぶりの水準を記録した。小泉総理の執政の節目を祝うかのような出来事である。確かに、「もはや、バブル崩壊」後ではない」のであろう。

四月七日

午後、前原誠司代表の後任を決める民主党代表選挙の結果、小沢一郎元副代表が新代表に選出された。民主党に合流した折の小沢氏の思惑通りに、事が運んだのであろうか。

ただし、筆者は、「政党代表としての小沢氏は、これから何をするのであろう」と訝る。小沢新代表が湾岸戦争直後に提起した「普通の国」論は、確かに世の反響を呼んだけれども、その「普通の国」への動きを実際の政策の上で加速させたのは、他ならぬ小泉総理であった。小泉総理の執政上の事績には、「政策」の中身よりも、たとえば昨夏の郵政政局の折、衆議院解散を

三月三十一日

午後、前原誠司代表以下の民主党執行部が総退陣するとの報が伝わる。筆者は、「エイプリル・フールは、今日だったかな……」と反応する。渡部恒三、国対委員長の前線復帰によって、民主党の党勢も「底値圏」を脱したかと思いはじめた矢先の出来事である。

早速、後任代表として菅直人氏や小沢一郎氏の名前が取り沙汰されているけれども、両氏ともに「昔の名前で出ています」政治家であるのは、間違いない。昨年の「九・一一」総選挙における惨敗の衝撃こそは、前原代表を登場させた最たる要因であったはずであるけれども、その衝撃は、今ではもう既に忘れ去られたのであろうか。小沢、菅の両氏が前面に出る限り、民主党の再生はない。二大政党制の定着も、夢物語であらう。

四月六日

小泉純一郎総理は、在任一八〇七日

決めた晩に「国民に聞いてみたい」と訴えたような「姿勢」が大きく与っている。その「姿勢」の所産こそが、衆議院での現有二九五議席なのである。翻って、小沢新代表は、一般国民に対しては、どのような「姿勢」を示そうとするのであろうか。

夜、在日米軍再編絡みで、額賀福志郎防衛庁長官と島袋吉和名護市長の協議が落着いたことを知る。在日米軍普天間飛行場をキャンプ・シュワブ沿岸に移設する案は、滑走路を海側に一本増設し、二本の滑走路をV字形に配置する旨、修正されるようである。筆者にとっては、民主党代表選挙よりも、こちらのほうがビッグ・ニュースである。それにしても、「V字滑走路」とは……。上手いことを考えつく人々がいるものである。

四月十一日

衆議院千葉七区補欠選挙が公示され

に達し、中曽根康弘元総理を抜いて、戦後では吉田茂、佐藤栄作の両宰相に次ぐ長期の執政期間を刻むことになった。後世、小泉総理の執政には、様々な評価が与えられるであろう。現下の経済復興が小泉総理の執政の直接の成果なのかは、色々と議論があるかもしれない。けれども、少なくとも「小泉の時代に景気が回復した」というのは、歴然とした事実であらうし、後世の小泉内閣への評価は、この事実を踏まえたものになるであろう。

実際、吉田、佐藤、中曽根の歴代宰相の執政期には、それぞれ、「朝鮮特需」「いざなぎ景気」「バブル景気」といった「景気回復・拡大」の風景がある。小泉総理もまた、その例には漏れなかったということになる。

東証株価指数(TOPIX)は一七七五・六七をつけ、IT(情報通信技術)バブル期最中の二〇〇〇年二月につけた高値を抜き、バブル崩壊過程の

る。此度の選挙は、実質上、経済官僚出身で埼玉県副知事を務めた自民党候補と千葉県議会史上最年少で議席を得た民主党女性候補の一騎討ちの模様である。ただし、此度の選挙が注目しているのは、小沢民主党の「初陣」であることに因る。もし、小沢民主党が初陣を飾るようならば、民主党の意気は上がるかもしれないけれども、逆の結果が出れば、小沢新代表の「豪腕神話」が既に過去のものであることは、明らかになるであろう。

自民党は、党を挙げて選挙に臨む構えの模様である。小沢新代表の影響力が少しでも残るようなことがあれば、小泉総理在任中はともかくとして、「小泉以後」が厄介になる。そのような観測があるのであろう。確かに、選挙は、「実弾の飛ばない戦争」である。

イラスト◎浅妻健司

さくらだじゅん 政治学者・東洋学園大学兼任講師